



刺激的に学ぶ

紺 秀行

●はじめに

私は、参加にはあまり積極的ではなかった。いつが申し込みの期日なのかも、しっかりと把握できておらず、再募集で滑り込んだ唯一の参加者だったのだ。そんな私が喝を入れてもらった二つの経験をもとに話を進めていきたいと思う。

●「NO」のチカラ

12時間の空の旅を経て、イギリスの地に到着した私がカルチャーショックを感じた最初の出来事は、ハートフォードカレッジの食堂で起こった。

店員さんが盛り付けをしてくれるバイキングのようなスタイルの朝食。それ自体は日本でもそれほど珍しくは無いと思う。自分の番が回ってくると、配膳係のおばさんがおもむろに「Vegetables?」と聞いてきた。迷った私は、答えをためらってしまった。するとおばさんはおもむろにトングで野菜をつかみ、ガバツと皿に盛ったのだ！「盛るの!？」心の中でそう叫んだ。

話は少し変わるが、日本という国は比較的少ない民族で形成されてきた。結果として、「日本人」の中には、俗に言う空気のような共通意識が存在する。対して、イギリスのよ

うな大陸に近く、多くの民族が共存してきた国は、そもそも共通の意識が介在しづらい状況にあるのだ。そんな国で日本の「空気」を読んでくださいなんて、どだい無理な話で、思い返せば当時の自分がどれだけ惚けていたかと思ってしまった。

結論、無言は金ではなく不利益なのだ。



●マジックワードと うすっぺら

私が話したいもう一つの経験は四日目の出来事、岡本尚也氏の講演である。正直、今回の研修で最も衝撃を受けたのは、この方のお話だった。印象的だったもので、まず、今ある社会のシステムについて、**根拠**を持って**批評**されていた点だ。何事も安易にこき下ろすことは簡単だが、岡本さんの場合、**客観的事実**から導き出したことを元に鋭く批評しており、その姿にしばれると同時にかなりの衝撃を与えられた。次にマジックワードに関するお話について記したい。岡本さん曰く、マジックワードとはいろいろなところに多用されているという。例えば、政治家の街頭演説。「市民の**皆さん**を**幸せ**にします。」**どうやって?**「山積する問題を**丁寧**に**処理**していきます。」**具体的に何?丁寧とは?抽象的かつキレイ**で聞く人を喜ばせるが、**具体性**を置き去りにした言葉——マジックワード。自分自身もこの言葉の多用に気づかされ、かなり面食らった。同時に恥ずかしくなった。この講習を通じて自分の自慢げに言ってきたことの**うすっぺら**さを痛感させられた。岡本さんが私たちに残してくれた**宿題**と向き合う日々が続きそうである。



●まとめ



ここには書き切れなかったが、他にも心を揺さぶられる多くの体験をすることができた。終わってみれば本当にあつという間でとても刺激的な一週間を過ごすことができたと思う。安寧よりも刺激を。慢心よりも満身の力で生きよう、そう思いました。

意思を持った偶然を必然に

岡本 尚也氏